

表4 リスクの高い震源の位置

領域	1	2	3	4	5	6	7	8
津波高	紀水沖		土佐湾沖			紀伊水道沖		
到達時間	土佐湾沖				紀伊水道沖			

表5 沿岸領域とリスクの関係

領域	1	2	3	4	5	6	7	8
P3値		◎	△		△	△	◎	
P5・P7値			△		△	◎	◎	
震源と津波 高の関低			◎		◎	◎		
到達時間	△				◎	◎	△	

◎：最もリスクが高い △：◎に次いでリスクが高い □：最もリスクが高い領域

5. あとがき

津波部会では、次の南海道地震で引き起こされる津波の防災対策を行う上で必要な(1)歴史津波の把握、中でも現在の港湾構造物を設計する際に用いられている1946年昭和南海津波や1946年チリ津波に比べて規模が大きかったことが知られている歴史津波(1605年慶長, 1707宝永, 1854年安政南海)の四国沿岸域における津波高の再検討を実施するとともに、(2)波源域モデルおよび(3)断層モデルを用いて種々の波源域を考慮した仮想的な津波から四国沿岸を領域別に分割し、グローバルな視点から津波のリスク評価を行った。これらの検討および評価の結果については、2~4節の結言で述べたとおりである。

これらの結果をふまえて、今後は(1)より詳細な津波防災に役立つような集落規模での津波リスクの評価を行うとともに、(2)津波によって破壊されるライフラインや環境のスムーズな復旧を考慮した津波防災のあり方を検討し、確立することが望まれる。